2018 年度　横浜国立大学地域連携シンポジウムを開催しました

2019 年 2 月 15 日（金）14 時半から、横浜情報文化センター6 階の情文ホールで『2018 年度横浜国立大学地域連携シンポジウム』を開催しました。
プログラムの前半は、19 グループの学生たちが「地域課題実習」の成果を報告。中間にラウンジでのポスター発表と投票をはさみ、後半はパネルディスカッション、そして最後にアワードの表彰式を行いました。

学生たちの工夫あふれる発表の数々

シンポジウムの幕開けは、中村文彦理事の開会の挨拶です。

学生たちの地域連携の活動にサポートくださっている方々への感謝と、シンポジウムでの充実した学びへの期待が述べられました。

開会の挨拶をする中村文彦副学長

プログラム前半の「地域実践アワード 2018」では、「地域課題実習」の 19 グループがそれぞれの活動について発表しました。
地域のさまざまな課題解決に取り組む「地域課題実習」は、横浜国立大学の学生の 7.3%が受講するカリキュラムです。中には、先輩から後輩へと熱心に受け継がれている取り組みもあります。

発表の持ち時間は各グループ 3 分。短時間での凝縮したプレゼンテーションが続きました。

「モビリティデザインの実践」の発表シーン

和田べんプロジェクトの発表シーン

１：モビリティデザインの実践
（概要：日本大通り・象の鼻パークを訪れる人たちの現状調査を行い、楽しめる要素を創造する都市計画を提案）

２：かながわ里山探検隊
（概要：「里山を心のふるさとに」をスローガンに、高齢者の多い里山で、自然保全活動として米づくりなどを実践）

３：かながわニューツーリズム
（概要：観光学の視点で南足柄について調査を行い、広報・交通・観光の流れをつくる仕掛けを提案）

４：都市の自然を楽しむライフスタイル
（概要：潮干狩り、昆虫採集、魚釣り、山菜天ぷらなど、中高生を招待してイベントを開催）

５：データで捉える地域課題・地域経済
（概要：第 100 回目の高校野球神奈川大会と経済効果と、大学祭『常盤祭』と経済効果についての 2 つの分析を実施）

６：現代世界の課題の探索と協力の実践 －ネパール支援プロジェクト－
（概要：ネパールの子どもの遊び場、女性問題、障がいを持つ子どもの問題などに着目し、現地調査と支援活動を展開）

７：横浜で屋台まちづくりを考える－ハマヤタイプロジェクト－
（概要：移動式の屋台を作り、大学周辺や関内などでカフェ、木工などのイベントを実施）

８：New-New Town を考える－郊外まちづくりプロジェクト－
（概要：古くなったニュータウンでピクニックや「まち歩き」のイベントを開催）

９：まちに開いた交流の場デザイン
（概要：野毛山の『CASACO』の１階を利用し、食事会や DIY ワークショップで交流を図る活動『YOKOCO』を展開）

１０：おおたクリエイティブタウン研究プロジェクト
（概要：事業継承に課題を抱える大田区の工場の魅力を発信する「就活プロジェクト」を企画実施）

１１：市民活動を体験して考える協働まちづくりプロジェクト
（概要：音楽フェスの広報を担当し、I love you を表現する「ポジポーズ」の写真を 2000 枚拡散し、イベントの成功に貢献）

１２：みなとまちプロジェクト
（概要：静岡県清水市の地域の歴史要素を磨くことでブランディングを行い、住民とともに『ミナトブンカサイ』を開催）

１３：ローカルなマテリアルのデザイン
（概要：都市と里山の人々をつなぐために、広葉樹の活用法を調査し、フレグランスや染めのプロダクツを開発）

１４：商店街とまちを繋ぎ、子どもと大人がコミュニケーションを多くとれるまち－上星川プロジェクト－
（概要：商店街情報のかわら版を作成し、地域、駅、大学で配布したり、上星川のパンを常盤祭で販売したりする活動で商店街の活性化に貢献）

１５：横浜うみみらいプロジェクト
（概要：横浜の海を楽しむ活動、海洋都市横浜のまちづくりや海のエネルギーについて考える活動などを展開）

１６：ワダヨコ
（概要：和田町と協力し、子どもに宿題を教える寺子屋や、商店街でクイズラリーやキャンドルナイトなどのイベントを開催）

１７：和田べんプロジェクト
（概要：横浜国大の麓にある和田町と協力し、2005 年から続くお弁当の販売をはじめ、ゆるキャラを活用した町の活性化にも協力）

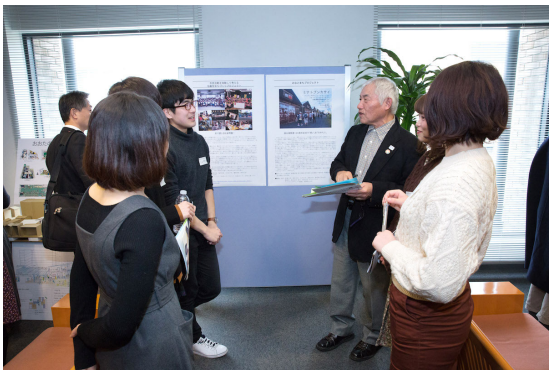
１８：人と農業を繋げるーアグリッジプロジェクトー
（概要：地産地消などを目指してきた活動の目的を明確化させるために、理念と組織づくりを徹底）

１９：アグリッジ商品開発
（概要：農業による地域活性化を目指して農産品の販売を試みて失敗し、魅力ある加工製品の販売促進支援に転換）

以上の 19 グループの発表終了後、2 名のゲストから講評をいただきました。「地域実習の良さは、教室で学んだことを活用し、地域といっしょに課題解決に活かせることにある」「自分たちができる小さなアイディアを実現していくことが大切」など、学生たちの活動にエールが送られました。ゲストの依田さやか氏は本校の卒業生でもあり、世界銀行の東京防災ハブに勤められています。また、秋元康幸氏は長年横浜市役所に勤め、2018 年度から本校の地域連携推進機構客員教授として教鞭をとっています。

その後、ホール脇のラウンジスペースに場所を移し、約 30 分間の「地域連携ディスカッション」を行いました。
限られた時間でしたが、周囲に展示された各グループのポスター発表を見ながら活発な交流が広がっていました。
そして、参加者それぞれが特に評価するグループを投票用紙に記し、アワード選出のための一票を投じました

「地域連携ディスカッション」の会場



ポスター展示の前での交流

地域連携の可能性を探るパネルディスカッション

後半は、「ヨコハマ・かながわの潜在力を活かした地域連携を探る」と題したパネルディスカッションを行いました。

4 名のパネラーによるパネルディスカッション

基調報告は２つ。

１つめは、高見沢実学長補佐の「横浜国立大学の地域連携の現状と課題」です。2004 年度から「地域課題実習」としてスタートし、2012 年度から「地域創造科目」が加わり、2017 年度から「Next Urban Lab」として組織され、学外の諸機関と連携協定を結びながら活動を展開してきた経緯の説明がありました。これからの目標は、学内の資源とニーズを明確にすること、また地域と大学双方のメリットが一致する持続的なプロジェクトを通じて地域の発展に寄与することであると示されました。

２つめの基調報告は、伊藤暁建築設計事務所の伊藤暁氏の「寛容さがもたらす持続性～神山町の事例」です。本校の卒業生でもある伊藤氏は、徳島県の神山町で設計やワークショップの仕事に携わって 10 年になります。森林に囲まれた中山間地域の神山町では過疎化が進み、現在人口は 5,300 人ほど。消滅可能自治体の筆頭にあがるような高齢化率の高い地域ですが、町民自身が「楽しい」と感じることの実践を積み重ねる「創造的過疎」の試みが展開されています。従来の成長モデルとは全く異なる神山町の試みを通して実感しているのは、一人ひとりが楽しむ姿勢が大切であることと、時代と社会の変化に適合するには長いタイムスパンで考える必要があることだと伊藤氏は語りました。

続いて事例紹介が２つ。

１つめは、箱根町企画観光部企画課の伊藤和生副課長の「箱根町の大学連携の取り組み」についてです。年間 2000 万人規模の観光地である箱根町ですが、平成の 30 年間で人口は約 4 割減少し、財政に大きな課題を抱えています。そのような状況の中で、2015 年の「新財源確保有識者会議」に横浜国立大学の伊集守直教授が有識者委員として参画から連携が始まり、2017 年からは「行政運営を考えるための町民会議」に池島祥文准教授がアドバイザーとして加わり、町の経済調査のための研究がスタートしました。その流れで 2018 年 2 月に包括連携協定が締結され、学生が開発した教材を使って小学校で授業を実施する『ワクワクフライデー』と、大涌谷エリアを対象とする『観光・防災アプリの開発と実証実験』、さらに『箱根町における循環構造の可視化』（→リンク）の経済調査が実施されました。

２つめの事例報告は、校友会評議員・富丘会理事長の宮田芳文氏から「地域から大学と連携するということ」です。宮田氏は、横浜銀行、神奈川新聞などの方々と協力し、横浜を拠点とする企業を訪ねて 28 社の参加のもとで「YNU 横浜経営者の会」を組織しました。2017 年から勉強会を定期的に開催するほか、「横浜港クルーズ」も企画しています。横浜は東京と隣接しているので都内の企業に目線が行きがちですが、同窓会組織を含め地元企業とつながりを深めることで多様な可能性が広がると宮田氏は考え、活動を展開しています。

基調報告と事例紹介に続いてのディスカッションでは、「活動は息長く続けていくことが大切」「人のためにやるのではなく、オープンなつながりの中で自分のためにやることが大切」「いろいろな楽しみがあることに気づくのが、連携のポイント」「学生さんが関わることで、住民の意識が変わるきっかけになる」「大学の研究成果をもっと発信すれば、連携の可能性が広がる」などの意見が交わされました。

同票で複数表彰が多かったアワード

パネルディスカッションが終わると、いよいよアワード表彰の発表です。

「校友賞」には、同票数で２チームが選ばれました。
「現代世界の課題の探索と協力の実践 －ネパール支援プロジェクト－」と「ローカルなマテリアルのデザイン」の２チームです。

「準 MVP 賞」は、やはり同票数で３チームが受賞しました。
「現代世界の課題の探索と協力の実践 －ネパール支援プロジェクト－」
「おおたクリエイティブタウン研究プロジェクト」
「ローカルなマテリアルのデザイン」
の３チームです。

そして「MVP 賞」を勝ち取ったのは、「アグリッジ商品開発」のチームでした。
「アグリッジ商品開発」チームは、農産物の販売と農産加工品の開発に行き詰まり、ニーズがあるのは農産加工品の販売促進であるという結論に達して方向を転換。地域の食品加工業者が製造する梅ジュレやピクルスなどを常盤祭で販売して成果を出しました。

MVP に輝いた「アグリッジ商品開発」チーム

「アグリッジ商品開発」チームが販売するピクルス

シンポジウムの最後の挨拶は、長谷部勇一学長です。
実践性は大学の柱のひとつであること、「自分ごととして考える」が大切なキーワードであること、そして東京に隣接する神奈川の潜在力を活かして地域の循環を活性化させる戦略が必要だということを、シンポジウムを通してあらためて実感できたと総括されました。

最後の挨拶をする長谷部学長

YNU 地域連携推進機構が核となり、大学が研究面でも地域との連携を行い、ローカルな知見をグローバルに役立てていきたいというビジョンも述べられました。